

日本軍のラオス南部進駐
—仏印武装処理後のパクセを中心に—

The invasion of the Japanese Army in Southern Laos
—Focus on Pakse after the Japanese *coup de force* in Indochina—

菊池 陽子

Yoko Kikuchi

東京外国語大学総合国際学研究院
Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨

In this paper, I will examine the invasion of the Japanese army in Southern Laos and focus on Pakse after “Meigo sakusen(operation)” with reference to available Japanese documents. These documents show that the Japanese army disarmed the French-Indochina army in Pakse and chased the French soldiers out of the city. Thereafter, they constructed a base in the Bolaven plateau and headquarters in Pakse; then they repaired the Pakse airport. Several residents were engaged in these construction efforts; however, the war ended without using these military installations. Thus, the efforts of the locals were wasted on unproductive war tasks.

キーワード：ラオス，パクセ，日本軍，仏印武力処理，

Keywords: Laos, Pakse, The Japanese Army, The Japanese *coup de force* in Indochina

はじめに

筆者は、拙稿「日本軍のルアンパバーン進駐」¹⁾において、第二次世界大戦末期のラオス北部、ルアンパバーンにおける日本による支配の一端を考察した。そこで、第二次世界大戦中、ラオスにおいては、1945年3月9日の「仏印武力処理」（明号作戦）までフランスによる支配が継続していたこと、日本が実際に支配したのは敗戦までの約5カ月



間であったこと、短期間ではあったが、この時期はラオス史にとって歴史的な転換点であると認識されていること、そうであるにもかかわらず、史資料の制約から研究がほとんどなされていないことを指摘した²。

本稿では、前稿と同じ問題意識から、パクセを中心としたラオス南部に限定して、明号作戦や日本軍の支配について可能な限り明らかにしたい。この時期のラオス南部やパクセに関する研究は管見の限りない。本稿で使用する史資料のほとんどは、軍人の回想録や連隊史を中心とする日本側の史資料、及びラオスでのインタビューから得た情報である。筆者は、本テーマに関して、日本での史資料調査、ラオスでのインタビューを継続中である。したがって、本稿は現時点での中間報告及び限定的な考察である。

I. 日本軍にとってのパクセ

パクセはメコン川とセドーン川の合流地点に位置するラオス南部の都市である。パクセから約 30 キロ南に位置するメコン川対岸の町、チャムパーサクは、チャムパーサク王国時代には都で、ラオス南部の中心地であったが、フランス植民地期になって川の合流地点にあり、交通の便の良いパクセがこの地域の経済、行政の中心地となった³。また、パクセの東部には、フランス植民地期に導入されたコーヒー栽培で有名なボラウェン高原（平均標高は約 1200 メートル）が広がっている⁴。1943 年の統計では、パクセの人口は 7300 人で、そのうちラオス人が 1000 人（約 14%）、ベトナム人が 4500 人（約 62%）、中国人が 1700 人（約 23%）、その他 100 人（約 1%）となっている⁵。フランス植民地期のラオスでは、都市の人口の大半はベトナム人であったが⁶、パクセにおいてもベトナム人が人口の 6 割強を占めていた。こうした人口構成は、日本軍がパクセに進駐した 1945 年 3 月時点でもほぼ同じであったと考えてよいであろう。

日本がインドシナに西欧の植民地政権である仏印政権を温存する政策から、仏印を武力処理する政策に変更したのには、連合軍がインドシナに上陸する可能性が現実味を帯びてきたことが決定的な要因であった⁷。フランスでは、ヴィシー政権崩壊後の 1944 年 9 月にド・ゴール政権が成立しており、同年 10 月にはアメリカ軍がフィリピンに上陸していた。日本の戦況が悪化するなかで、日本軍は、インドシナの防衛という見地から仏印武力処理を実行し、フランス支配を一掃することにした⁸。

その際、万一、連合軍が仏印に上陸した場合、南北に長いインドシナの海岸線を防衛するのは困難であるため、第 38 軍参謀部は、最終的な日本軍の籠城地としてラオスのジャール平原とボラウェン高原を考えていた。第 38 軍参謀の林秀澄は、戦後の回想で、

南方の戦局が次第に悪くなって、圧迫されてくる。あるいは海岸地帯で日本軍は全滅するかもしれません。けれども、海岸地帯で全滅するようなみっともな

いことは、インドシナ半島においてははしたくないと思いました。というのは、奥地にボロバン高原（ママ）とか先ほど申しましたジャール平原、安南語ではチャンニー平原とありますが、このいい高原地帯がある。ここを利用しないで全滅するなんてみっともないことはしたくない。だから、南方軍の戦線は、島は別としても、大陸に足がついている軍は逐次ボロバン平原あるいはジャール平原中心に後退して行って、ジャール平原、ボロバン平原を複郭陣地にしたい。ことにジャール平原は南方軍最後の拠点だという思想が私にあったんです⁹。

と述べている。

上記の林の回想から、第 38 軍にとって、ラオスにおいてより重要であったのは、内陸路でハノイと連絡が可能なジャール平原であったと考えられる¹⁰。また、『戦史叢書』中の仏印武力処理の作戦計画、第 38 軍司令官、土橋勇逸による作戦計画の着想には、複郭陣地を構築する場所としてボラウエン高原の名は出てこない¹¹。しかし、後述するように、パクセに進駐した日本の部隊に陣地構築の命令が届き、ボラウエン高原に陣地が構築された。さらに、パクセを南方軍司令部の最終的な移転地とする計画も進んでいた。日本の敗戦により、ボラウエン高原の陣地もパクセの司令部も日本軍の最終的な籠城地として使用されることはなかったが、日本軍は起こりえる最終事態に備えて陣地を構築していた。したがって、パクセを中心とするラオス南部は、最終的に籠城するためにも、日本軍にとって、フランス支配を一掃する必要があった都市であったと言える。

II. パクセの武力処理

パクセにおいて、1945 年 3 月 9 日、明号作戦を実行に移した部隊は、歩兵第 29 連隊（福島県会津若松で編成されたため若松連隊とも呼ばれる）第 11 中隊の一小隊¹²と第 29 連隊長の指揮下に入れられた歩兵第 8 連隊第 1 大隊及び第 2 機関銃中隊であった¹³。以下、両連隊の連隊史をもとに、パクセにおける明号作戦の実施について述べる。

歩兵第 29 連隊は、インパール作戦に参加した後、タイを通過して、仏印武力処理のために、1945 年 2 月 25 日にカンボジア東部のストウン・トラエンに連隊本部を置いた。その後、第 11 中隊の一小隊をパクセに分駐させた¹⁴。

一方、歩兵第 8 連隊は、1945 年 1 月末にシンガポールからタイに移動した。第 1 大隊は明号作戦参加のために歩兵第 29 連隊配属となり、タイ東部のウボンで作戦準備を進めた。それに先立って、第 2 機関銃中隊の一員が仏印駐屯連絡所勤務員という名目で大隊のためにパクセを中心に情報収集にあたった。地誌情報、仏印軍および保安隊の警備状況などの情報を収集し、メコン川を渡るのに必要な資材、資料の準備を行った¹⁵。

3 月 9 日、午後 10 時に土橋司令官から仏印全土に明号作戦実行の命が下った。ウボンから移動し、パクセ対岸のタイ側で待機していた第 1 大隊を主力とする約 190 名は、

用意していた民間の小船で一斉にメコン川を渡る予定であったが、対岸のパクセからの銃声で小船は霧散し、数隻を残すのみとなってしまった。そこで、数隻の船でのピストン輸送に切り替え、大隊全部が川を渡り切ったのは10日の午前4時となっていた¹⁶。

パクセでは、保安隊はすでに逃亡していた。パクセ地区の砲兵連隊は日本軍の進駐を察知し、防御を固めていたため、奇襲はできず、砲兵連隊の兵舎を包囲したままスピーカーで降伏勧告を行った。その間、兵舎から狙撃され日本兵に戦死者が出た。午後1時、日本兵が兵舎に突入すると、フランス兵はメコン川を下って逃亡し、午後2時、兵舎を接收した。その後、市内の主要公共機関、フランス軍幹部の宿舎、理事官府¹⁷、銀行、病院等を接收し、パクセにいたフランス居留民の收容を行った。フランス居留民は、派遣されてきていた憲兵¹⁸に引き渡され取り調べが行われた¹⁹。

歩兵第29連隊の連隊史にも、3月9日、仏印武力処理の命令が下ると、歩兵第8連隊と協力して仏印軍、保安隊を武装解除し、フランス人を逮捕したこと、10日の14時にすべての処理が終わったことが記述されている²⁰。両連隊史の記述はほぼ一致していることから、パクセにおいては、日仏両軍間の撃ち合いはあった²¹が、激しい戦闘行為なしで仏印軍の武装解除が行われ、逃亡したフランス兵も多数いたが、10日の14時過ぎにはフランス人の收容が終わったと言える。日本軍の進駐に対して、パクセの人々からの抵抗は見られなかったようで、第29連隊の連隊史には、「一般人民ハ我ノ宣伝ニヨリ平静ナリ」²²と記述されている。一般の人々にどのような宣伝を行ったのかは明らかになっていないが、10日の午後には日本軍がパクセを掌握したと言えるであろう。

パクセを掌握すると、第1大隊は、パクセの治安維持と警備、及びフエやサワンナケートに至る広範な地域のフランス兵の掃討作戦に従事し²³、第11中隊はパクソン(パクセの東部、ボラウェン高原に位置する町)、サラワン(パクセの北東部、ボラウェン高原の北部に位置する町)の保安隊を武装解除した²⁴。当時、パクソンでフランス人の下で役人をしていたラオス人P.A.氏によると、日本軍が来るということを聞いて、フランス人は逃げたので、彼自身も日本兵に刀で首を斬られてしまうのではないかと思い、怖くなってサラワンに逃げた。サラワンでは、日本兵に見つからないように隠れて日本兵の様子をうかがっていたという²⁵。フランスの史料によれば、サラワンのフランス人は数が少なく、彼らは、パクセでは日本軍によって軍人も官吏も虐殺されたとの噂を聞き、サラワンから徒歩で山岳地帯へ逃げた。保安隊の多くはベトナム人であったとある²⁶。おそらく、第11中隊がパクソンやサラワンに到着した時には、フランス人は逃げた後で、ベトナム人からなる保安隊を武装解除したと考えられる。

3月17日頃、第1大隊は、歩兵第29連隊長から明号作戦参加の任務を解除されたため、タイに移動し、歩兵第8連隊の配属に戻った²⁷。これ以降、歩兵第29連隊がパクセの治安維持や警備とともに、パクセ周辺の逃亡フランス兵の搜索、掃討作戦に従事することになった。

歩兵第29連隊の連隊史によると、3月22日から連隊主力がボラウェン高原の仏印軍討伐を行い、26日に終了、ラオス南部地域のフランス兵の討伐は5月2日に終了した

ことになっている²⁸。歩兵第29連隊第7中隊の戦史によると、第7中隊は3月10日からカンボジア北部やラオス中部（マ）の山岳森林地帯に逃げ込んだ仏印軍を求めて討伐行動を行った。4月25日にパクセに向かい、ボラウェン高原で仏印軍約1個中隊を追尾、攻撃し、損害を与え、敗走させた。5月9日に討伐行動が終了し、クラチエ、ストウン・トラエンの警備についたとある²⁹。記述の違いはあるが、カンボジア北部やラオス南部における逃亡フランス兵の搜索、討伐作戦は5月上旬に終了したと考えてよいであろう。都市を掌握し、当面の間、敵からの攻撃の心配がなくなった第29連隊は、この後、この地で、陣地の構築という戦争遂行のための新たな命令を受け、その作業に従事することになった。

III. ボラウェン高原での陣地構築とパクセへの司令部移転

ストウン・トラエンに連隊本部を置いていた歩兵第29連隊は、5月下旬、軍命令により、管轄地域であったカンボジア北部やラオス南部に、連合軍上陸に備えた陣地を構築する作業を開始した³⁰。第29連隊史にはボラウェン高原の陣地構築について、具体的に記した記述はないが、第3航空隊所属の第111野戦飛行場設定隊が6月から「パクソン施設構築作業に従事」³¹したという記録が残っている。第38軍にとって最終的な籠城地の候補であったボラウェン高原には、陣地構築のための部隊が派遣されたのであろうと考えられる。そして、実際、敗戦までの間に陣地の構築は進んだようで、敗戦をパクセに移動している最中に知り、パクセからボラウェン高原に移動して次の命令が出る9月初旬までそこにいた歩兵第86連隊第2大隊の兵士の回想では、「ボロバン（マ）高原に総軍司令部が移動、（中略）ボロバン高原のジャングルの中には百棟に近いニッパ兵舎がつくられていた。造ってまだ住んだ様子がなかった。相当数の部隊を収容できる兵舎数であった。」³²と記述されている。日本軍は、連合軍がインドシナに上陸してきた場合、最終的にボラウェン高原に籠る準備をしていた。

そして、南方軍作戦記録のインドシナ作戦指導には「南方軍ハ諸般ノ情勢ニ鑑ミ六月五日戦斗司令所ヲ「ダラット」ニ推進スルト共ニ将来ノ推移ヲ予察シ永久的司令部位置ヲ「パクセ」ニトシ着々諸般ノ準備ヲ進メタリ」³³とある。陣地構築と同じ時期にパクセへの南方軍司令部移転も考えられており、ボラウェン高原への陣地構築とパクセへの司令部移転は一体となって進められていたと考えられる。当時、パクセにいた日本兵の回想録の中でも、戦況が悪化するなかで、軍がラオスの山中に籠っての長期戦を想定していたこと³⁴や、パクセに司令部を建設していたこと³⁵が記述されている。

さらに、同時期に開始されたパクセの飛行場改修もこうしたパクセへの司令部移転と関連したことであったと考えられる。前述の第111野戦飛行場設定隊は6月からパクセでの「飛行場設定整備」³⁶を行っている。この「飛行場設定整備」には、前述の部隊に加え第52飛行場設定大隊等、159名が従事したとの記録³⁷がある。

こうした陣地構築や飛行場改修作業は、日本兵だけで行われたのではなく、現地の人々を労働力として使用した。さらに、フランス人の俘虜も労働力として使用しようと考えていた。パクセのフランス人俘虜収容所には約 500 名、パクソンのフランス人俘虜収容分遣所には約 200 名のフランス人俘虜がいて、陣地構築作業に従事させようとしていた³⁸。ただ、実際、フランス人俘虜を労働に従事させたのかどうかは不明である。史資料がないことをもって従事させていないとは言えないが、現時点で日本側の史資料にはフランス人俘虜を前述の建設作業に従事させたという記録は見当たらない。また、後に引用する N.P.氏の証言には、フランス人と一緒に働いたという話は出てこない。しかし、M.T.氏は「日本兵がフランス人を一列に並べてメコン川から日本兵のいるところまで水を汲ませているのを見た。」³⁹と話していることから、何かしらの労働を俘虜にさせていた可能性はある。

歩兵第 29 連隊第 7 中隊の戦史によれば、陣地構築作業は、日本兵にとっては「これまでの戦いの疲れを癒す良い機会」であり、「平和な住民感情、豊かな大地のめぐみ、長い戦場生活のなかでの思いがけない楽しい日々」であった。しかし、現地の人々にとっては、「大勢の現地人を駆使して休むことなく続けられた」⁴⁰陣地構築作業であった。

パクセの飛行場改修作業に従事した N.P.氏（当時、コーン島ナー村在住）は、以下のように述べている。陣地構築作業に従事した方々の証言は得られなかったが、同時期に現地の人々を使用して行った大規模な施設建設作業として、同じような状況であったと考えられる。

日本軍が入ってきたときは 19 歳であった。日本軍が入ってきて、飛行場建設に駆り出された。本当は兄が行くはずであったが、行けなくなって自分が行った。フランスが作ったパクセの飛行場の改修作業に労働力として駆り出された。コーン島から船でチャムパーサクに出て、そこで泊って、歩いてパクセまで行った。ナー村からは 5 人が労働力として出た。各村から数人ずつ出て、全部で 3500 人くらいがパクセの飛行場に集められた。皆、家からヤシの実を 4, 5 個持ってきて、それを売って、道中で物を買った。牛車を 3000 台くらい使って、土を運んで土地をならした。1 か月と 15 日間働いたときに、まだ飛行場は完成していなかったが、日本兵が帰ったので、そこで仕事を終えて歩いて村まで帰った。

飛行場改修作業時には飛行場の近くのカンクン村で寝泊まりしていた。火を焚いてその周りに寝た。9 人ずつのグループに分かれて、食事は自分たちで用意しており、休みなしで働いた。労賃は出なかった。中国人の通訳がいた。仕事の時には 15 人くらいのグループに分かれて仕事をした。竹を切って土を運ぶかごを作った。

飛行場の作業に行ったのは、村長に言われたから。村長から言われたら、従わなくてはならないので行った。行く前に飛行場改修の仕事をすることは知っ

ていた。作業員は男性ばかりだった。ラオ人だけが集められていた。少数民族はいなかった。

日本兵については、怠けているとラオス人をひどく怒鳴る。怒鳴るのが嫌だった。ある時、あまり仕事をしないでいると、日本兵が刀を振りかざしたので、怖くなって川に入って泳いで逃げた⁴¹。

また、日本兵がパクセに入ってきた時に、自身は怖くてパクセ郊外の農村に隠れていたが、兄が飛行場改修作業に行ったという M.T.氏（当時カンクン村在住）は、「日本兵は男性のみ飛行場の労働に駆り出した。」「牛車で土地をならした。」「食べるものは自分で調達し、賃金はでなかった。」「メコン岸にあった兄の家を日本兵がいろいろな資材置き場に借りていた。」「日本軍が来た時に逃げてしまって、人のなくなった家を、日本兵は壊して、その木材を飛行場の改修に使用した。」ことを覚えている⁴²。

2人の証言だけで断定することはできないが、ここから、日本軍はラオスの村長に依頼して、各村から人員を派遣してもらっていたこと、労働に対して賃金を支払っていなかったこと、作業の資材や工具は現地調達していたらしいこと、飛行場改修は未完に終わったこと等は言えるのではないであろうか。実際に作業に従事した人々は、村長の命令であったとはいえ、手弁当で賃金もない労働、仕事をしていないと怒鳴られる現場に耐えなければならなかったのであるから、その大変さは想像に難くない。さらに、N.P.氏の言うように 3500 人ほどが集められていたとすると、当時のパクセの人口の半分弱の人数となる。これだけの人数を集められたのか検証する手段はないが、N.P.氏にとっては 3500 人に匹敵するような大人数が集められていた現場であったのであろう。日本軍の依頼を受けたラオス側が、日本軍の意向に沿うように努力した結果であると言えるのではないであろうか。しかしながら、日本側の史料、ラオスの方々の証言から、飛行場を改修したということだけはわかるが、日本軍の依頼内容や作業内容、ラオス側の対応についてなど、史資料の制約から具体的なことは全くわからない。陣地構築作業についても同様である。

IV. 日本軍によるパクセ支配

明号作戦後、パクセを掌握した日本軍は、パクセ周辺地域での逃亡フランス兵の討伐に続いて、陣地構築や飛行場改修を行った。その間、パクセにおいて、治安の維持、警備にあたったが、パクセをどのように支配したのであろうか。日本側の史資料では、前述のように明号作戦の実施と陣地構築や司令部の設置について言及したものはあるが、パクセの支配について言及したものは見当たらない。したがって、日本軍と現地の行政当局との関係や支配の在り方については不明である。しかし、前述のように、村長に依頼して現地のラオス人を建設作業に動員していたと考えられるので、パクセを支配して

いたフランス人官吏が逮捕され、収容所に入れられていた状況のなかで、フランス支配下で働いていたラオス人やベトナム人官僚をそのまま利用して支配したと考えるのが自然である。

フランス支配下のラオスでは、一般的に上中級官僚はベトナム人で、ラオス人は下級官僚として雇われることが多かった⁴³。パクセの各民族の人口割合からして、ベトナム人官僚の人数の方がラオス人官僚よりも多かったであろう。したがって、パクセの行政は、日本軍の下で、主としてベトナム人が担ったであろうと考えられる。

当時、日本兵から「いしまつ」という日本名で呼ばれていたという T.V.S.氏は、両親がベトナムからパクソンに移住してきた時に生まれ、1歳の時にパクセにやってきたというベトナム人である。彼は、日本軍がパクセに進駐した時、13歳であった。彼は、日本兵の手伝いをしたことがあり、当時の様子を以下のように語った。

日本兵はラオスやベトナムの人々には何もしなかったが、パクセでは、フランスと日本の戦いで、ベトナム人の兵士が2人死亡した。日本兵はフランス兵と戦っただけでベトナム人やラオス人とは戦わなかった。日本兵はフランス兵を捕まえて捕虜にした。

最初に日本兵が来た時は、何をされるか怖かった。しかし、だんだんと、日本兵は何もしないことがわかった。日本兵は食料を持ってきていなかったもので、市場で買っており、ラオス人やベトナム人が食料を支援していた。その買ったものを日本兵のいるところにまで運ぶ手伝いをしていた。友達のベトナム人と一緒に手伝いをしており、友達は日本兵から「さんごろう（さんくろう？—筆者—）」と呼ばれていた。食料は奪ったのではなく、購入していた。購入の際には、インドシナ三国でその時に共通に使用されていたお金で支払っていた。日本兵は水浴びを好まず、お湯を使ったので、お湯を沸かして運んであげたことがしばしばあった。こうした手伝いに関して、賃金をもらっていた訳ではない。仕事をすると一緒に食事をした。

日本兵は週に一度、市場のところで柔道や剣道の実演、数人が足をひもで縛って進んでいくもの（ムカデ競争のことであると思われる—筆者—）をして見せたので、次第に噂が広まって、だんだんと多くの人が見に行くようになった。

日本軍は行政には関わらなかったと思う。パクセにいた期間は短かったので、特に何もしていないと思う⁴⁴。

当時13歳であったため、日本軍がどのように支配していたのかについてはほとんど覚えていないが、特に日本兵の食を支える手伝いをしていた。日本名をつけられて呼ばれていたように、頻繁に食料運搬の手伝いをしていたそうである。一人の証言から一般化することはできないが、パクセの行政だけではなく、フランスに代わって支配する側となった日本兵の生活も、彼らの協力に支えられていたと言えるのではないだろうか。前

述の歩兵第 86 連隊第 2 大隊の兵士は、敗戦直後のパクセで、「安南人は親日的であった。」との感想を抱いている⁴⁵。しかし、パクセの住民の約 6 割を占めるベトナム人からすれば、支配者がフランス人から日本兵に代わっただけであって、特に日本兵に協力した訳ではなかったのかもしれない。

一方、パクセの住民のなかでは少数派であったラオス人に対しては、同じ兵士が、「パクセのラオス人は日本兵に対して親日感を持っていなかった」との感想を述べている⁴⁶。ラオス人官僚の中には、日本軍による仏印武力処理時に、前述の P.A. 氏のように他の場所へ逃げたり、フランス兵と一緒に逃げ、行動を共にしたりした人がある⁴⁷が、パクセのラオス人に慕われていたブンウムはフランス兵と一緒に反日レジスタンスに参加している⁴⁸。ブンウムは当時、サワンナケート県チャンポンのチャオムアン（郡長）であったが、チャムパーサク王家の出身であり、南部のラオス人には「王」とみなされていた人物であった⁴⁹。パクセのラオス人に対して影響力のある人物がフランス兵と一緒に反日レジスタンスに加わったことは、パクセのラオス人の対日感情を左右した可能性があると考えられる。

V. 日本降伏後のパクセ

日本降伏時のパクセには、歩兵第 29 連隊の他に、司令部や飛行場の建設にあたっていた部隊、パクセの警備のために 5 月初旬に派遣されてきた部隊⁵⁰がいた。さらに、パクセ分隊へ派遣途中の憲兵⁵¹や歩兵第 86 連隊第 2 大隊のようにパクセへの移動中に日本が降伏し、降伏後にパクセに到着した部隊⁵²もあった。戦争終結とともに捕虜となっていたフランス兵が解放され、パクセは日本兵とフランス兵であふれていた。フランス兵のもとには、軍用機からパラシュートで荷物が落とされていたが、日本兵の武装解除が行われていなかったため、フランス兵と日本兵が武力衝突する事態にはならなかったという⁵³。

8 月下旬から 9 月上旬にかけて、各部隊はそれぞれベトナムやタイの集結地に向かった。歩兵第 86 連隊第 2 大隊は、パクセ到着後、ボロウエン高原に移動し、9 月初旬に移動命令が出てパクセに戻ったが、タイのウボンへ集結するように命令が届いたのは 9 月下旬であった。その間、他の部隊はそれぞれの集結地に移動し、パクセにいた邦人もサイゴンに引揚げた。そのため、パクセは日本兵にとって火が消えたようであったと同部隊の兵士は回想している⁵⁴。こうして、9 月下旬にはパクセからすべての日本兵が撤退した。一方、この間、フランスはすでにラオス南部再占領に向けての準備を進めていた⁵⁵。

最後に、日本降伏後のパクセに関して、フランス人殺害事件について付け加えておきたい。1945 年 8 月 17 日、パクセのフランス人俘虜収容所に収監されていたフランス人高官 2 名⁵⁶が、トラックでサイゴンへ護送される途中、カンボジアのクラチエで日本兵

に殺害された。日本の降伏に対するフランス人俘虜の暴言に激怒してのことであったと言われている。降伏直後のことであり、殺害に関与した6名は第38軍の軍法会議にかけられ、懲役刑になった(1名逃亡)。その後、この6名と新たに1名がフランス軍に捕らえられ、戦犯としてサイゴンの法廷で裁かれた(1名は欠席裁判)。5名に最高刑の死刑が、2名に無期懲役(後に有期刑に減刑)が宣告された⁵⁷。この事件と直接関係がある訳ではないが、フランスは戦犯容疑に関して、フランス人俘虜に対する虐待、致死、待遇の問題を重視⁵⁸しており、パクセの俘虜収容所長、同収容所の通訳、パクソンの俘虜収容分遣所長が戦犯容疑で捕らえられた⁵⁹。

おわりに

限られた史資料からの考察で、推測に推測を重ねていることは否めないが、仏印武力処理後のラオス南部について、以下のようなことが言えるであろう。日本軍は明号作戦直後の1945年3月10日にパクセを掌握すると、ベトナム人の協力を得て、パクセの治安維持や支配にあたった。パクセ周辺地域でのフランス兵の搜索、討伐が終了すると、陣地構築、司令部建設、飛行場の改修などの作業を現地の人々を使用して行った。フランス人俘虜を使用した可能性もある。陣地や司令部は建設したが、使用されることなく日本は降伏した。

日本軍にとって、戦況が悪化するなかで、パクセを中心とするラオス南部は最終的な籠城地としての意味を持っていた。しかし、その籠城地は、第38軍司令官の土橋によれば、「有力な英、米空軍をもって猛爆を浴びせかけられては、にわか作りの複郭などは一たまりもなく崩壊し、長期抵抗は到底不可能」であったのである。それでも陣地を構築したのは、「将兵一同に対しては最後まで抗戦することを意識させねばならず、また陣地が多少でも構築されておれば多少の時日も稼ぐことができるので、陣地を準備することにした」⁶⁰からであり、前述の第38軍参謀、林が「ここを利用しないで全滅するなんてみっともないことはしたくない。」からであった。つまり、仏印での戦争を指導していた上層部は、戦争末期になって陣地や司令部を作ったところで戦況には何ら影響を与えないことはわかった上で、戦争遂行のための努力を最後まで続けたことを示すためだけに、陣地や司令部の建設作業を行ったと言える。

そうした日本軍のある意味自己満足のための努力によって、ラオスは戦場となり、ラオスの人々は無駄な労働に従事させられた。上層部の認識はどうであれ、現場で作業に従事していた日本兵は、目の前の与えられた任務を行っていた。日本軍にとってラオスはさして重要な地域ではなく、「大東亜共栄圏」の辺境であったかもしれないが、ここに日本が行った戦争の一面が透けているように思えてならない。

謝辞：本稿執筆にあたっては、史料を提供していただいた立川京一先生、パクセやサワ
ンナケートでインタビューに応じて下さったラオスの方々、インタビュー時にご協力い
ただいたブンタウィー・ソーサムパン先生（Dr. Bounthavy Sosamphanh）に大変お世話に
なりました。ここにお礼申し上げます。なお本稿は日本学術振興会科学研究費基盤研究
（A）課題番号 25243007 平成 25～29 年度「第二次世界大戦期日本・仏印・ベトナム
関係研究の集大成と新たな地平」（代表：白石昌也早稲田大学教授（現名誉教授））の研
究成果の一部です。

注

- ¹ 菊池 2019 : 100-117
- ² 菊池 2019 : 100-101
- ³ Martin Stuart-Fox 2008 : 247
- ⁴ Martin Stuart-Fox 2008 : 27
- ⁵ Martin Stuart-Fox 2008 : 408 民族別統計であるので、Lao をラオス人ではなくラオ人とした方が適切であるかもしれないが、本稿では、ラオス人に統一する。したがって、本稿で使用しているラオス人は、ラオス国民という意味ではなく、タイ系ラオ人の意味で使用している。
- ⁶ Martin Stuart-Fox 2008 : 408 1943 年の同じ統計によると、ラオスの主要都市（ビエンチャン、ルアンパバーン、タケク、サワンナケート、パクセ、シェンクワン）のうち、ルアンパバーン以外は、ベトナム人人口が約 6 割から 8 割を占めている。
- ⁷ 白石、古田 1976 : 26
- ⁸ 防衛庁防衛研究所戦史室 1969 : 571
- ⁹ 林 1989 : 394-395
- ¹⁰ ジャール平原（シェンクワン）については、別稿で考察する予定である。
- ¹¹ 防衛庁防衛研究所戦史室 1969 : 666-671 ここには、タケク東方の複郭陣地についての記述がある。タケクについても別稿で考察したい。
- ¹² 阿部 1998 : 101-102
- ¹³ 中野 1983 : 564, 568
- ¹⁴ 阿部 1998 : 101-102 人数の記載はないが小隊であるので、最大 50 名程度であると考えられるが、『歩兵第八聯隊史』のパクセ地区攻撃要図に記載されている「日本軍守備隊曹長以下 30 名」（中野 1983 : 568）というものが第 11 中隊の小隊であるとすると、約 30 名の部隊であったであろう。
- ¹⁵ 中野 1983 : 563-564, 568-569
- ¹⁶ 中野 1983 : 568-569
- ¹⁷ 『歩兵第八聯隊史』には、仏国領事館と記述されている（中野 1983 : 569）が、パクセの理事官府であると考えられるため、ここでは、理事官府とした。
- ¹⁸ 『南方軍第一憲兵隊史』には、パクセ分隊があったことが記述されているが、いつパクセに憲兵分隊が設置されたのかは不明である（大島 1979 : 171）。おそらく、この時は、近隣の憲兵隊からの派遣であったと考えられる。
- ¹⁹ 中野 1983 : 568-569
- ²⁰ 阿部 1998 : 101-102
- ²¹ 日仏両軍の撃ち合いにより、フランス人の死者も出た。『歩兵第八聯隊史』には保安隊長の妻が流弾により不慮の死を遂げたと記載されている（中野 1983 : 570）。フランスの資料では、パクセに日本軍が進駐した際のただ一人の犠牲者として、日本兵に射殺された保安隊長の妻と記載されている（Fonds DEUVE : G14-1）。
- ²² 阿部 1998 : 102
- ²³ 中野 1983 : 569
- ²⁴ 阿部 1998 : 102
- ²⁵ P.A.氏（男性：1928 年 サワンナケート県チャンポン郡生まれ）へのインタビューより（2019 年 8 月 4 日 サワンナケート）
- ²⁶ Fonds DEUVE : G14-1
- ²⁷ 中野 1983 : 569-570
- ²⁸ 阿部 1998 : 102
- ²⁹ 第七中隊史編集委員 1981 : 53-54

-
- 30 第七中隊史編集委員 1981 : 55
- 31 JACAR Ref.C12122423900
- 32 歩兵第八十六聯隊史編纂事務局 1973 : 547
- 33 JACAR Ref.C14060136600 引用にあたって、常用漢字に改めた。
- 34 芦田 1984 : 434
- 35 大島 1979 : 171
- 36 JACAR Ref.C12122423900
- 37 JACAR Ref.C16120196000
- 38 岡崎 1996 : 50 フランス人俘虜 500 名に対して、パクセの収容所の職員は士官 2 名、下士官 40 名、朝鮮軍属 15 名、通訳 1 名であった。
- 39 M.T.氏 (女性 : 1927 年、パクセのカンクン村生まれ) へのインタビューより (2018 年 8 月 12 日 パクセ)
- 40 第七中隊史編集委員 1981 : 55-56
- 41 N.P.氏 (男性 : 1926 年、コーン島ナー村生まれ) へのインタビューより (2018 年 8 月 11 日 パクセ)
- 42 M.T.氏へのインタビューより
- 43 マーチン・スチュアート・フォックス 2010 : 53
- 44 T.V.S.氏 (男性 : 1932 年、パクソン生まれ) へのインタビューより (2017 年 8 月 21 日 パクセ)
- 45 歩兵第八十六聯隊史編纂事務局 1973 : 548
- 46 同上
- 47 Kikuchi 2017 : 65
- 48 Jean Boucher de Crèveoeur 1985 : 35 ブンウムは、第二次世界大戦後、フランスがラオスを再占領する際にフランスに協力した人物として知られている。
- 49 ピラティウオン 2008 : 31
- 50 独立歩兵第 6726 隊第 2 中隊及び鉄砲隊の一部が 1945 年 5 月 10 日からパクセの警備にあっていた (厚生省援護局 1961 : 533)。久留米第 1 陸軍予備士官学校第 11 期生、第 12 期生の約 10 名は、日本降伏直前に同部隊付を命じられてサイゴンからパクセに向かい、パクセで降伏を知った (芦田 1984 : 433-434)。
- 51 大島 1979 : 171
- 52 歩兵第八十六聯隊史編纂事務局 1973 : 540-543
- 53 同上 : 544
- 54 同上 : 548-549
- 55 Jean Boucher de Crèveoeur 1985 : 34-35
- 56 岩川 1995 : 414 によると 3 名
- 57 岡崎 1996 : 50-53
- 58 岩川 1995 : 420
- 59 岡崎 1996 : 51,53
- 60 防衛庁防衛研究所戦史室 1969 : 670

参考文献

- 阿部輝郎 編. 和田七郎・八巻和夫 監修. 1998. 『若松聯隊全史』若松聯隊全史刊行委員会（非売品）
- 芦田信夫. 1984. 「ラオス山中、戎衣の旅ー八月十五日前後のことー」. 久士南風会編集委員会 編『学徒兵われらー久留米第1陸軍予備士官学校第十一期生の記録』久士南風会 pp.433-437
- 岩川隆. 1995. 『孤島の土となるともーBC級戦犯裁判ー』講談社
- 大島親光 発行責任者. 1979. 『南方軍第一憲兵隊史』南一憲会（限定出版・非売品）
- 岡崎善一. 1996. 「インドシナ（旧仏印）における終戦悲話ーある主計少尉の刑死ー」石川県戦友諸団体協議会『北陸戦友』第22号 pp.49-53
- 菊池陽子. 2019. 「日本軍のルアンパバーン進駐」. 東京外国語大学東南アジア地域ユニット『東京外大 東南アジア学』No.24. pp.100-117
- 白石昌也. 古田元夫. 1976. 「太平洋戦争期の日本の対インドシナ政策ーその二つの特異性をめぐってー」. アジア政経学会『アジア研究』第23巻第3号 pp.1-37
- 第七中隊史編集委員編. 1981. 『歩兵第二十九聯隊第七中隊戦史ー大東亜戦争におけるその歩みー』（私家版）
- 中野公策 編集責任. 1983. 『歩兵第八聯隊史』歩兵第八聯隊史編纂委員会
- 林秀澄. 1989. 「インドシナ三国独立の経緯」. 同台経済懇話会『昭和軍事秘話 - 同台クラブ講演集 - 』中巻 pp.374-398
- 防衛庁防衛研究所戦史室. 1969. 『戦史叢書 シツタン・明号作戦』朝雲新聞社
- 歩兵第八十六聯隊史編纂事務局 中新井光雄 代表. 1973. 『歩兵第八十六聯隊史』（限定出版）
- マーチン・スチュアート・フォックス. 菊池陽子 訳. 2010. 『ラオス史』めこん
- Jean Boucher de Crèveoeur. 1985. *La Liberation du Laos 1945-1946* Service Historique de L'Armée de terre. Château de Vincennes
- Kikuchi Yoko. 2017. "Japanese Involvement in Laos: From the Invasion of the Japanese Army in Northern French Indochina in 1940 to the End of World War Two" in Masaya Shiraishi, Nguyen Van Khanh & Bruce M. Lockhart eds., *Vietnam-Indochina-Japan*

Relations during the Second World War: Documents and Interpretations, Waseda University Institute of Asia-Pacific Studies, Tokyo, pp.60-70

Martin Stuart-Fox. 2008. *Historical Dictionary of Laos* The Scarecrow Press, Inc. Lanham, Maryland • Toronto • Plymouth, UK

(未公刊史料・文献)

厚生省援護局. 1961. 『タイ・仏印方面部隊略歴』 国立国会図書館

ピラティウオン マリナ. 『ラオス近代史におけるチャムパーサク王家』 (東京外国語大学地域文化研究科 2008 年度修士論文)

Fonds DEUVE. Série G(Avant Guerre-Après Guerre)14-1. Mémorial de Caen. Service des Archives et de la Documentation

JACAR (アジア歴史資料センター). Ref.C12122423900 (陸軍航空部隊略歴 (その6) 付.航空部隊の隷指揮下にあったその他の部隊) 防衛省防衛研究所

Ref.C14060136600 (南方軍作戦記録 比島、緬甸、濠北、ボルネオ) 防衛省防衛研究所

Ref.C16120196000 (司 (3FA) 部隊兵力配置要図 昭和 20 年 6 月 25 日) 防衛省防衛研究所